

2005年度博士学位論文

多言語状況下における個人言語管理

- シンガポール、マレーシア、フィリピンの場合 -

桜美林大学大学院国際学研究科

石田由美子

目 次

第 部 個人言語管理の前提

第 1 章 本研究の枠組み	1
第 1 節 研究目的と方法	1
第 2 節 論文の構成と各章の概要	2
第 3 節 理論的背景 - 個人言語管理と言説 -	2
3.1 言語管理のレベル	3
3.2 個人言語管理の要件	3
3.3 個人言語管理と「言説」	4
3.4 深層個人言語管理のプロセス	5
第 2 章 データと分析方法	8
第 1 節 調査概要	8
1.1 調査方法	8
1.2 調査の対象	9
第 2 節 個人言語管理の分析方法	12

第 部 東南アジア 3 カ国における個人言語管理について

第 3 章 東南アジア 3 カ国の言語管理	15
第 1 節 東南アジアにおける言語管理の意味	15
1.1 東南アジアにおける社会的背景	15
1.2 対象 3 カ国における英語の意味	16
第 2 節 シンガポールにおける言語管理の概観	18
2.1 社会的背景	18
2.2 国レベルの言語管理	19
2.2.1 席次管理	19
2.2.2 実体管理	20
2.3 政府レベルの言語管理 (普及管理)	20
2.3.1 教育システム	21
2.3.2 The Speak Mandarin Campaign (SMC)	24
2.3.3 The Speak Good English Movement (SGEM)	25
2.4 シンガポールの言語管理	26
第 3 節 マレーシアにおける言語管理の概観	28

3.1	社会的背景	28
3.2	国レベルの言語管理	29
3.2.1	席次管理	29
3.2.2	実体管理	30
3.3	政府レベルの言語管理(普及管理)	31
3.3.1	1957年の独立まで	31
3.3.2	1957年の独立から1969年まで	32
3.3.3	1970年以降	33
3.4	マレーシアの言語管理	35
第4節 フィリピンにおける言語管理の概観		36
4.1	社会的背景	36
4.2	国レベルの言語管理	37
4.2.1	席次管理	37
4.2.2	実体管理	39
4.3	政府レベルの言語管理(普及管理)	40
4.3.1	1946年の独立まで	41
4.3.2	1946年から1972年まで	42
4.3.3	1973年の憲法制定後	42
4.3.4	1987年の憲法制定後	44
4.4	フィリピンの言語管理	45
第4章 深層個人言語管理と言説 - 東南アジア3カ国の場合 -		47
第1節 深層個人言語管理と言説		47
1.1	言説生成とその要素	47
1.2	分析の概要	50
第2節 深層個人言語管理から来た言説		52
2.1 シンガポールの場合		52
2.1.1	S c 1の言説の分析例	52
2.1.2	その他の調査対象者の言説	55
2.2 マレーシアの場合		56
2.2.1	M c 6の言説の分析例	57
2.2.2	M i 6の言説の分析例	59
2.2.3	M m 1の言説の分析例	62
2.2.4	M m 3の言説の分析例	65
2.3 フィリピンの場合		67
2.3.1	P t 1の言説の分析例	68
第3節 他の要素(深層個人言語管理以外)から来た言説		71
3.1 他の領域の思想		72
3.1.1	M m 6の言説の分析例	72

3.1.2	P n 2 の言説の分析例	75
3.2	認知プロセスのキャパシティ	79
3.2.1	M m 2 の言説の分析例	79
3.3	エチケット	82
3.3.1	M i 1 の言説の分析例	82
3.3.2	M i 7 の言説の分析例	84
3.4	受容	87
3.4.1	S c 7 の言説の分析例	87
3.4.2	M c 2、M c 7、M i 5 の言説について	90
3.5	自動化(ルーティン化)	91
第4節	言説性の強い言説と領域、機能などの関係	91
4.1	言説性の強い言説と領域	92
4.2	言説性の強い言説と機能	93
第5節	言説の種類あるいは構築のされ方	95
第5章	深層個人言語管理の類型と東南アジア3カ国	98
第1節	深層個人言語管理の類型	98
第2節	深層個人言語管理の例1(シンガポール)	101
2.1	席次管理	102
2.1.1	言語に関して	102
2.1.2	教育言語に関して	111
2.1.3	個々のコミュニケーションの領域での言語使用について	112
2.1.4	席次管理のまとめ	116
2.2	実体管理	118
2.3	普及管理	125
2.4	習得管理	130
2.5	世代差についての管理	136
2.6	民族とその文化についての管理	140
第3節	深層個人言語管理の例2(マレーシア)	142
3.1	席次管理	142
3.1.1	言語に関して	143
3.1.2	教育言語に関して	167
3.1.3	個々のコミュニケーションの領域での言語使用について	170
3.1.4	席次管理のまとめ	178
3.2	実体管理	181
3.3	普及管理	188
3.4	習得管理	198
3.5	世代差についての管理	213
3.6	民族とその文化についての管理	214

第4節 深層個人言語管理の例3(フィリピン).....	217
4.1 席次管理.....	217
4.1.1 言語に関して.....	218
4.1.2 教育言語に関して.....	239
4.1.3 個々のコミュニケーションの領域での言語使用について.....	245
4.1.4 席次管理のまとめ.....	252
4.2 実体管理.....	253
4.3 普及管理.....	265
4.4 習得管理.....	269
4.5 世代差についての管理.....	276
4.6 民族とその文化についての管理.....	277
第6章 東南アジア3カ国における個人言語管理の変異性	278
第1節 国別特徴.....	278
1.1 シンガポールの特徴.....	278
1.2 マレーシアの特徴.....	279
1.3 フィリピンの特徴.....	280
1.4 対象3カ国の共通点および相違点.....	281
1.4.1 席次管理の共通点.....	281
1.4.2 席次管理の相違点.....	282
1.4.3 実体、普及、習得管理など.....	284
第2節 世代別特徴.....	285
第 部 本研究のまとめと課題	
第7章 結論と今後の課題	287
第1節 個人言語管理の概念の構築に向けて.....	287
1.1 論文の流れ.....	287
1.2 個人言語管理の要件.....	288
1.3 個人言語管理と国・政府レベルの言語管理との関係.....	290
1.4 個人言語管理の概念.....	293
第2節 今後の課題.....	294
参考文献	296

論文要旨

1. 研究の目的

本研究の目的は、個人レベルでの言語管理である「個人言語管理」の概念を構築することにある。本研究で対象とする「個人言語管理」とは、個人が言語に関して何を問題とし、その問題にどのように対処しているのかを総合的に表すものである。

従来、言語計画（または政策）については、主に国の政策や教育システムなどを扱った研究が行われてきた。しかしその管理のプロセスに参加する個人がどのような立場をとっているかという研究は、あまりなされてこなかった。本研究では、複数のレベルで言語管理が行われているとする言語管理理論を用い、従来の言語計画（政策）をこのような言語管理の一つのレベルととらえている。一方、個人レベルの言語管理である「個人言語管理」とは、個人が自身の言語問題にどのように対処しているか、他のレベルで示された言語問題の解決方法などを実際にどのように実行しているか、もしくはしていないのかなどを表すものである。

個人言語管理の概念を考える際には、まず個人言語管理が「個人が自分自身の言語問題を管理する」プロセスであるという前提を出発点とすべきであろう。この前提に立った上で本研究では、シンガポール、マレーシア、フィリピンの東南アジア3カ国で行った半構造化インタビューの記録をデータとして使用し、「個人の言語に関する管理が談話の中でどう語られているか、もしくは個人の言語管理が談話にどのように現れてきているか」について、インタビューで得られた具体的なデータを用いて検証した。

しかし、検証の過程で半構造化インタビューの記録をデータとして採用する際には、そのデータが「言語管理（本研究ではこの言語管理を深層個人言語管理としている）」からの談話であるのか、それ以外の要素からの談話であるのかによって、データを振り分ける必要性が生じた。そのため本研究では「言説」という概念を新たに使用して、まずインタビューの記録を「深層個人言語管理」からの談話と、それ以外の要素からの談話に振り分けた（第4章）。振り分けられたデータは、まず深層個人言語管理からの談話のみを使用して深層個人言語管理の類型別に例を挙げ、個人が言語を管理する上で何を問題としているか、そしてどのような管理を行っているかを示した（第5章）。その後全てのデータを対象として、国レベルなど他のレベルとの関係を踏まえた上で、個人言語管理の国別、世代別特徴などについて考察を行った（第6章）。

2. 研究方法

本研究で調査の対象としたのは、いずれも東南アジアに位置するシンガポール、マレーシア、フィリピンの3カ国である。この3カ国を選択した理由は、社会的・歴史的な共通点を

持ちながら 1970 年代以降の「国・政府レベル」の言語管理に大きな相違点が見られることと、3 カ国ともに複数の言語が存在する多言語国家であるという理由からである。国・政府レベルの言語管理は当然個人の言語管理に影響を与える。したがって 3 カ国の国・管理レベルの言語管理に相違点があることにより、個人言語管理の特徴がより明確になることを期待した。また多言語国家であることによって、深層個人言語管理の類型（席次管理、実体管理、普及管理、習得管理）すべてにおいて管理が行われている例が得られることも予測された。

調査方法は、半構造化面接法を用いた（村岡 2002）。この面接法（インタビュー）によって、深層個人言語管理の類型に沿った共通の質問を対象者全員に行うことができると同時に、各調査対象者が実際にどのような行動をしているのかをある程度まで把握することが可能であると思われたからである。インタビューの記録はテープに録音し、すべて文字化を行った。インタビュー時間は約 30 分から 80 分である。なお使用言語は英語であり、当該地域の母語話者によって校正が行われた上で、最終的な文字化のチェックを行っている。

調査は 3 カ国で計 32 名を対象に行われた。対象者については前述の 1970 年を境界年として、それ以前に教育を受けた世代（50 代）とそれ以降に教育を受けた世代（20 代）別に設定した。その上でシンガポールとマレーシアについては民族を、フィリピンについてはタガログ語の母語話者か非母語話者かを考慮した。調査対象者の内訳はシンガポール 6 名（中国系 20 代 3 名、中国系 50 代 3 名）、マレーシア 18 名（マレー系、中国系、インド系：各 20 代 3 名、50 代 3 名）、フィリピン 8 名（タガログ語母語話者：20 代 2 名、50 代 1 名、タガログ語非母語話者：20 代 2 名、50 代 3 名）である。

インタビューにあたって事前に用意した質問は、国別に若干の違いはあるものの、すべて言語に関する質問である。質問項目は 11～12 項目であるが、最初の 8 問は 3 カ国共通であり、教育言語や家庭での使用言語など、言語に関する基本的な質問である。その他の質問の中では「（国語または公用語）が（英語、マレー語、フィリピン語）であることで、便利もしくは不便を感じますか」という質問が注目される。なぜなら、この質問に対する答えによって、第 4 章でインタビューのデータを深層個人言語管理から来たものであるか、それ以外の要素から来たものであるかを振り分けたからである。

3 . 各章の概要と理論的背景

本論文は大きく 3 部に分かれる。第 1 部では個人言語管理の前提について、第 2 部では東南アジア 3 カ国における個人言語管理と言説について、第 3 部では個人言語管理の概念の構築に向けた本研究のまとめと課題についてそれぞれ述べる。第 1 部は第 1 章と第 2 章、第 2 部は第 3 章から第 6 章、第 3 部は第 7 章で構成される。各章における内容は以下に述べるとおりである。

第 1 部

第 1 部では、個人言語管理の前提に焦点をあてた。まず第 1 章では、本研究の枠組みとし

て研究の目的と方法、論文の構成と各章の概要、さらに理論的背景として個人言語管理、深層個人言語管理と言説に関する概念を挙げた。特に第3節で述べられる言説の概念は、第4章で行う分析の前提でもある。第2章では、本研究で扱うデータとその分析方法についての情報を取り上げた。研究の目的と方法についてはすでに述べたが、理論的背景については、それが関わる章でそれぞれ記述する。ここでは、個人言語管理の要件について記述する。

【個人言語管理の要件】

「個人言語管理」とは言語管理の一つのレベルであるから、他のレベルと同様に言語管理の要件を満たしている必要がある。満たされるべき要件とは以下の6つである（ネウストプニー（1995）より抜粋）。

1. 言語問題の範囲：言語教育も含んだすべての言語問題を扱う。
2. 言語問題解決の可能性：すべての問題は解決できない。解決できない問題のための処理も必要である。
3. 言語問題以外の問題との結び付き：言語問題は「言語」だけの問題ではない。問題をコミュニケーションの過程の中で考え、社会の問題とのつながりで見ることが必要である。
4. 言語問題のレベル：（国全体のレベル中心ではなく）談話のレベルまで複数のレベルを取り扱う。
5. 言語問題のプロセス：言語問題は「管理プロセス」の形をとる。
6. 言語問題処理の普遍性：言語問題は社会によってそのパラダイムが異なる。

このうち4については、本研究の目的自体が個人レベルの言語管理であるから当然であるが、他の5つの特徴についても「個人言語管理」がそれを満たすものであることが必要である。本論文では第7章において、第4章、第5章、第6章を通じて得られた「個人言語管理」の特徴がこれらの要件を満たしたことを確認している。

第 部

第 部では、第 部で述べた前提をもとに東南アジア3カ国を対象とした分析を行った。まず第3章では、対象国について特に国・政府レベルにおける言語管理に焦点をあて、その概観を述べた。社会的背景、言語政策、教育制度などについて、先行研究から管理の類型別に記述し、特に個人に影響を与えそうな点に注目して述べた。第4章から第6章までは段階的にデータの分析を行った。本論文では、半構造化インタビューの記録をデータとしたが、そのデータ内には深層個人言語管理から来た談話（言説性が弱い）と、その他の要素から来た談話（言説性が強い）が混在していると考えられる。個人言語管理を明確にするためには、二者を分ける必要が生じるため、第4章では言説性についての分析を行い、データを言説性の強弱で分けた。第5章では言説性が強い談話を除いたデータを用いて、深層個人言語管理の類型別に分類し、調査対象者が言語に関して何を問題とし、その問題にどのように対処しているのかについて分析を行った。第6章では、第3章での国・政府レベルの言語管理と第4

章、第5章で得られた結果を総合的に考察し、深層個人言語管理の規範や問題を処理する管理プロセスの特徴、どのような場合に言説性が強い談話が現れるのかなどについて国別、世代別にその特徴を挙げた。

第部については、まず「言説」について述べた後、第4章、第5章についてそれぞれの理論的背景を述べる。

【個人言語管理と「言説」】

個人言語管理の概念化には、インタビューで述べられたことを、国・政府レベルの言語管理を参考とした類型別に分類する必要があるが、一人の調査対象者のインタビュー記録全体をみて分析した場合、矛盾する点が現れる場合がある。例えばあるマレー系マレーシア人が、普段は主に英語を使用していると述べる一方で、国語としてのマレー語を非常に強く擁護する談話がある場合などは、どちらの発言をその調査対象者の席次管理として分類を行うかについては容易に決めることはできない。このような矛盾の解消のために、本論文では、「言説」という観点を使用してデータを分別することで問題の解消に努めた。

「言説」については、Neustupný (1989) で、「個人がある事がらについて述べる場合には語り方があって、その語り方は一定の規則による」として、それを「イディオム」と名づけているが、本研究では Neustupný の「イディオム」を「言説」と呼ぶ。本論文において分析の対象とするインタビューは、個人の言語的背景という一つの事がらについての半構造化インタビューである。調査対象者はインタビュー全体を通して常に自分自身の言語管理について一定の言説の規則を持って述べている（言説化している）と思われる。したがって、本研究ではインタビューで述べられたことはすべて個人言語管理の言説として考える、という立場をとった。

言説生成の構造については図 - 1 (11 頁) で示したとおり複数の生成要素があるとした。言説を分別するにあたっては「行動」に注目して、行動を伴った言説を「深層個人言語管理」という生成要素から来た言説、行動の伴わない言説を「言説性の強いもの」として深層個人言語管理以外の生成要素から来た言説とした。

言説が生成されるにはある一定のルールが働き、言説には複数の生成要素があるが、個人言語管理の分析のための第一段階では、まず言説のどの特徴が深層個人言語管理から来ると思われるかを特定する必要がある。そのために、談話（本研究では半構造化インタビューの記録）に現れる深層個人言語管理から言説までのプロセスに、3つの段階を想定した（11 頁 図 - 2 参照）。つまり

- A. 「行動」
- B. 「考え方」(信念、態度など)
- C. 「言説」(表現、意味) の3つである。

行動とは、個人が行うさまざまな行動を指す。また考え方については、言語や言語管理に対してだけではなく、その他思想、エチケットまでも含む個人の信念や態度などが考えられる。言説については2つの種類が考えられる。一つは表現（形）、もう一つは言葉の意味（内容）である。

言説化される場合は必ず上記の3つの段階のいずれかを通るが、「言説」は「考え方」や「行動」を常にそのまま表現しているとは限らない。なぜなら「言説」生成の要素には、深層言語管理以外の要素が存在するからである。しかし深層言語管理から来る言説には必ず行動が含まれる必要がある。そこでまず、上記3つのすべての組み合わせを図-3(11頁)で示した。行動のみ、考え方のみ、言説のみ、行動と考え方、行動と言説、考え方と言説、行動と考え方と言説、である。

本論文で使用するデータは言説化されたものであるから、データには言説を含む組み合わせである、
、
、
が混在していると言える。そして、実際の行動を伴った場合の言説の生成要素が「深層個人言語管理」であるため、深層言語管理から来る言説とは行動を含む組み合わせである
と
であると言えよう。

以上の理論的背景を踏まえて、第4章ではどの言説が上記組み合わせの
と
、すなわち「深層個人言語管理」から来たものである(と思われる)のか、どの言説がそれ以外の生成要素(、
)から来たものである(と思われる)のかをデータを用いて分析した。

【第4章】

上記で述べた「言説」という概念を使用してデータを振り分けたのが第4章である。第4章では「(国語または公用語)が(英語、マレー語、フィリピン語)であることで、便利もしくは不便を感じますか」という質問に対する答えに注目した。なぜなら、行動そのものを聞いている質問ではないこと、したがって言説性の強い発言が得られる可能性が高いこと、行動の有無は行動そのものを聞いているインタビューの他の質問(1~8)の答えから判断可能であること、質問内容が3カ国共通で比較が容易であるという理由からである。

分析は、ハイムズ式モデル(Neustupný 1998)における5つの大きなカテゴリーに沿って行った。5つのカテゴリーとはセット規則、成分規則、配列規則、表層化規則、管理規則である。セット規則は、前述の質問をした場合とした。成分規則では、参加者規則(調査対象者の言語的背景)と内容の選択(調査対象者のなかにある膨大なインプットのなかから、状況に応じて調査対象者が言説化してもよいと思う内容を選ぶ)、配列規則では内容の配列(選択された内容をどのように配列するか)を主な分析の対象とした。管理規則とは、逸脱、留意、評価、調整計画、調整計画の実施、という5段階の管理プロセスを支配する規則である。他の規則(成分規則や配列規則)が実施されている際に問題が生じた場合に働く規則であるため、各規則の段階で考察した。表層化規則は本論文では取り扱わなかった。

このようにハイムズ式モデルを使用して、特定の質問の答えを分析した結果、データは「深層個人言語管理」から来たものである(と思われる)言説と、それ以外の要素からきたものである(と思われる)言説に振り分けられた。続いて第5章では、第4章で得られた「深層個人言語管理」から来たものである(と思われる)言説(すなわち
と
)のみを対象として、深層個人言語管理の類型別に分類・整理し、個人が言語管理を語る時の規範および言語問題を処理する管理プロセスの分析を行った。

【第5章】

第5章では、「深層個人言語管理」から来た言説のみを対象として、類型別に分類を行い分析を行った。個人言語管理については、予め他のレベルの言語管理と同様にいくつかの類型があることを予測し、すでに行われている国・政府レベルの言語管理の研究を参考にして、以下に挙げる6つの類型を立てた。

A．席次管理、B．実体管理、C．普及管理、D．習得管理、E．世代差についての管理、F．民族とその文化についての管理、である。

これらの項目については、まず渋谷(1992)の言語計画の内容を参考¹にしてA、B、Cという項目をたてた。DについてはKaplan & Baldauf (1997)のようにA、Bの枠組みに含める考えもあるが、Cooper (1989)を参考²にして独立した項目として取り上げた。さらに対象3カ国の状況を考慮して独自にE、Fという項目を追加している。またこれらの項目はさらに詳細な項目に分けられている。インタビューで述べられたことをこれらの類型別に分類し、それぞれの類型ごとにどのような規範を持ち、何を問題ととらえているのか、そして問題が生じた時どのような管理を行っているのか(いないのか)について明らかにしたのが第5章である。

【第6章】

第6章では、第3章で記述した国別の概要を考慮した上で、第4章、第5章で得られた結果について、国別、世代別に考察している。

国別特徴であるが、まずシンガポールにおける言語管理の大きな特徴の一つは、特に英語を実質的な第一言語とするという席次管理の規範において、国・政府レベルと個人レベルの言語管理が同じであるということである。これは国、政府、教育システム、会社、家庭などの各レベルの言語管理間に密接な関係が築かれていることの現れであるとも言える。したがって教育言語が英語であるという教育システム内での規範に対しても、個人言語管理で問題は認識されず、国・政府レベルの強い言語管理に対しても、個人はむしろその強い管理を肯定していると思われる。一方、国語であるマレー語や、公用語である標準中国語とタミル語、さらに中国諸言語については、国・政府レベルでの管理や規範が英語に比べてかなり弱く、個人言語管理でも同様で、やはりそこに国・政府レベルと個人の言語管理に差が生じなかった。したがって、「言説性の強い発言」はほとんど見られなかった。

マレーシアではシンガポールに比べてかなり複雑な個人言語管理が行われていた。マレー語を国語であり唯一の公用語であるとする国・政府レベルの席次管理に対して、個人の席次管理が一致しない場合があるからである。マレーシアの国・政府レベルの席次管理はかなり強く、個人の席次管理が国・政府レベルのそれと一致していない場合、個人は国・政府レベルの席次管理を擁護したり自身の席次管理を明確に述べないなどの調整行動をとる必要に迫

¹ 渋谷 (1992)では席次計画、実体計画、普及計画としているが、本稿では用語の統一を図るため席次管理、実体管理、普及管理とした。

² Cooper (1989)では acquisition planning (習得計画)となっているが、本稿では習得管理とする。

られる。したがって、マレーシアの調査対象者からは「言説性の強い言説」が多くなされた。

フィリピンにおける言語管理の特徴は、国・政府レベルの言語管理が弱いという点である。特に席次管理については、国語はフィリピン語、公用語はフィリピン語と英語とされており、教育言語についても両言語とされてはいるが、教育システム内で実施される段階ではその言語管理が十分に機能していない。したがって個人言語管理における席次管理が国・政府レベルの言語管理と違っていても、その違いが個人にとって問題とは強く認識されないため、国・政府レベルの言語管理を擁護したり、自身の言語管理について明確に述べなかったりなどの調整行動につながる可能性が弱い。加えて、調査対象者は実際にフィリピン語と英語を習得していることから、深層言語管理が素直に言説に現れ、結果的に「言説性の強い言説」は多く見られなかった。

上記の3カ国における個人言語管理の最大の共通点は、個人が席次管理、実体管理、普及管理、習得管理、世代差についての管理、民族とその文化についての管理（フィリピンは除く）について、言語管理を行っていたことである。席次管理や普及管理といった個人では調整計画や調整計画の実施が難しい管理においても、個人言語管理の対象として管理を行っているプロセスが確認できたということが3カ国に共通する点である。

一方、相違点としては、マレーシアでは「言説性の強い言説」が多く見られたが、シンガポールやフィリピンでは「言説性の強い言説」が少なかったことである。またシンガポールやマレーシアでは社会を一次的に見た発言が多くなされたが、フィリピンではほとんどが自身を一次的に見た発言であり、社会を一次的に見た発言は非常に少なかった。これは、国・政府レベルの言語管理の強さが影響していると思われる。シンガポールとマレーシアでは国・政府レベルの言語管理が強い。したがって個人言語管理が国・政府レベルと一致する場合は問題がないが、一致しない場合は「言説性の強い言説」が多くなされる。また国・政府レベルの言語管理が強いため、個人は普段から社会を一次的に見る見方に接する（もしくは身に付ける）機会が多い。一方、フィリピンでは国・政府レベルの言語管理が弱い。したがって個人言語管理が国・政府レベルと一致しても一致しなくても発言をする際に強い管理が起らず、「言説性の強い言説」は少ない。そして国・政府レベルの言語管理が弱いために、個人が社会を一次的に見るといった習慣が生じにくいと考えられた。

実体管理については3カ国に大きな違いは見られず、実体管理そのものに対して特に熱心な態度は見られなかった。実体管理については個人間の差が非常に大きく、共通していることは言語の実体について個人がそれぞれに規範をもち、それにしたがって管理をしているという点であった。

普及管理については、特にマレーシアでは席次管理と違った態度が見られた。マレーシアでは席次管理に関して「言説性の強い言説」が多く見られたが、席次管理と密接に関係している普及管理については、政府に対しても自由に発言している姿勢が見られた。シンガポールとフィリピンについても同様で、政府に対しての意見などでも自由に発言している姿勢が見られた。したがって、普及管理についても個人がそれぞれの規範を持ち、管理を行っているが、席次管理について何か述べる際ほど、国・政府レベルの言語管理を意識してはいないと言えるだろう。

習得管理については、教育制度の影響が大きいと言える。対象3カ国ではこの点で差がみられた。シンガポールにおいては、特に英語に関してそれを実質的な第一言語にするという各レベルの席次管理が一致しているため、英語の習得管理は最優先でなされているが、他の言語については個人の言語管理の強弱が大きく影響している。言語の習得能力と個人の言語管理の弱さによっては、多言語・多民族国家であるにもかかわらず言語のバラエティは失われる方向に向かう可能性が考えられた。

一方、マレーシアでは英語に関しては国・政府レベルでの習得環境があまり整っているとは言えないにもかかわらず、多くの個人が英語の習得の管理を積極的に行っていた。国語であるマレー語と民族の母語は国レベルの言語管理として行われているため、結果的にマレーシアでは各民族の母語と英語という多数の言語が存在する多言語国家という形を保っており、たとえ英語の導入が進んでもこの状態はしばらく続くと思われた。

フィリピンではシンガポール、マレーシアに比べて英語もフィリピン語も全国的な習得環境があまり整っているとは言えない。したがって言語の習得や使用状況は地域により大きな差が生じている。ただし英語については全国的に、また個人でも比較的強い習得管理を行っていると思われた。フィリピン語については全国的な普及は進んでいるが、実際の使用については地域差が大きく、今後もこの状態が簡単に解消されると思われない。フィリピンについては国・政府レベルの主導による強い言語管理が行われる可能性は低く、言語の習得についても個人言語管理によるところが非常に大きい。しかし英語を重要な言語とする規範は変わらないだろう。

世代差については、全体的に50代については、言語についての関心が高い傾向が見られた。また実体管理についてもこの傾向が見られ、言語の質については20代に比べて50代の方がより強い言語管理を行っていると言える。しかし、世代差については、今回の調査からは非常に明確に現れたとは言えない。

以上が6章で得られた考察である。

第 部

第 部、第7章では、第 部で述べた研究の前提、第 部で行った分析について考察を行い、本研究の目的である個人言語管理の概念の構築を試みた。また今後の課題についても述べた。

第7章では、論文を通じて述べてきた「個人言語管理」の全体像をまとめたものを、図-4「個人言語管理と国・政府レベルの言語管理との関係」(12頁)として表した。個人が言語についてなにかを述べようとする場合、一番上の1から4、図の左から右に向かうプロセスがとられると思われる。一番上のAの例を取り上げると、まず1で国・政府レベルの言語管理と個人の行動が原則として一致している場合は「問題なし」と思われるが、2の個人の認識としては、「問題なし」の場合と「問題あり」の場合が考えられる。問題がない場合は3の規範の段階で深層個人言語管理の規範と行動が一致している場合であり、その場合4のデ

ータ（インタビューの記録）における発言は深層個人言語管理（行動＋考え方＋言説）から来た発言となる（Sc1,2,3...）。

図 - 4 では個人言語管理と国・政府レベルの言語管理との基本的な関係を図にしているが、まず 1 の国・政府レベルの言語管理と個人言語管理については、原則として行動が一致する関係、行動が一部一致する関係、原則として行動が一致しない関係の 3 つの関係を示した。原則として行動が一致する場合は一般的に問題なしと認識されよう。しかし 2 の個人の認識の場合は、問題なし、問題ありと二通りに認識される可能性がある。問題ありと認識した場合は、たとえば、「自分はマレー語が母語であるからマレー語が国語であるのはよいが、マレーシアの将来を考えた場合は別の考え方がある」といった場合である。

行動が一部一致する場合も、個人の認識としては問題なしと問題ありにわかれると判断した。たとえば問題ありとした E は、「英語と標準中国語の二言語話者であるが考え方としては完全に標準中国語が優勢である」といった場合である。この場合、行動が一部一致しているので、行動が伴うとする深層個人言語管理の条件を満たしてはいるが、本論文では「進んで使いたくはないが使っているという状態」を受容として言説性が強い発言とした。

原則として行動が一致しない場合は問題ありとされるのが一般的だが、個人によっては問題なしと認識している。たとえば F は、自分の行動とも考え方とも違うが、マレー語を支持した場合である。エチケットや受容といった要素が考えられたが、どちらも原則として行動が伴わず言説性が強い発言である。G については背景に個人の思想（言語に対する以外の規範）がある場合をさす。原則として行動が一致しない場合で、個人の認識でも問題ありとしている場合は、原則として行動が一致し、問題なしと認識している A と発言内容はまったく逆となるが、発言そのものは深層個人言語管理から来た言説と言える。

最後に I として管理が不能になった場合を挙げた。この場合、行動はあるがその行動に対して個人の認識がないため管理不能となった状態で、認知プロセスのキャパシティの不足として言説性の強い言説と判断した。

ここで、個人言語管理がどう行われるかに影響するのは、2 の個人の認識であると言える。同じ状況でも問題なし、問題ありのどちらであるかを認識するのは個人の言語管理の強弱や話の内容に対する関心、態度や考え方が大きく影響するからである。さらに 2 の個人の認識には、1 の国・政府レベルの言語管理の強弱が大きく影響するであろう。今回は特にマレーシアの調査対象者から言説性が強い言説が多くなされた。マレーシアは国・政府レベルの言語管理が、教育システムや社会で良く機能している国である。それが個人のレベルでも国・政府レベルの言語管理との関係を常に意識せざるを得ない状況を作り出していて、言語について何らかの発言をする場合は個人の言語管理に影響を与えていると思われた。一方でフィリピンでは国・政府レベルの言語管理がそれほど強いとは言えない。したがって個人のレベルでは、個人は専ら自分の言語問題に向き合えばよく、言語について発言する際も国・政府レベルの言語管理との関係をあまり考慮する必要がないと思われた。これはまた、同じく言説性が強い発言があまり見られなかったシンガポールで、国・政府の言語管理と個人の言語管理が非常に近いと思われた点との違いでもある。

次に 3 の規範についてであるが、今回の調査対象者が示した傾向から、東南アジア 3 カ国

に共通した深層個人言語管理の規範が得られた。

深層個人言語管理の規範（東南アジア3カ国の場合）

複数言語の習得

英語は重要で、当然習得されるべき言語である

言語はそれぞれに、社会的な機能がある

言語の習得は特に困難ではない

それぞれの言語について習得の度合いについての目安を持つ

自分に関係しない言語（もしくはその機能）に対して管理をしない

個々のコミュニケーションの領域では相手、場面、話の内容などに合わせて言語を選択する

以上の7点が、多言語、多文化である調査対象国共通の深層個人言語管理の規範である。なお、深層個人言語管理以外で規範となるものとしては、思想、宗教などが挙げられる。

【個人言語管理の概念】

最後にすべてを総合的に考察し、本論文における「個人言語管理の概念」としてまとめた。これは今後の個人言語管理の概念を構築する一歩としたい。なお、本論文では東南アジア3カ国における調査対象者とのインタビュー記録によって、個人言語管理の概念を構築することを目指したが、ここでまとめた「個人言語管理の概念」は今回の対象3カ国にとどまらず、さまざまな状況にも対応可能な基本的な概念とするべく考察を行っている。

1. 個人言語管理は、「個人が自分自身の言語問題を管理する」プロセスである。
2. 個人が言語について語る場合には、深層個人言語管理という要素からきた言説と、それ以外の要素からきた言説とが談話の中に表れる。
3. 深層個人言語管理における問題の範囲は、言語の席次、実体、普及、習得、世代差、民族差まで幅広く、個人はそれぞれにおいて規範を持ち、問題が生じた場合にはプロセスの形をとった管理を行っている。
4. 深層個人言語管理以外の要素とは、思想、認知のキャパシティ、エチケット、受容などである。
5. 個人言語管理には、管理への態度（積極的、消極的）、管理の範囲（全体的、部分的）、管理の強さ（強い、弱い）、管理の主体（社会全体が一次的、自身が一次的）などの点で、管理に幅があり柔軟性がある。
6. 個人言語管理は、他のレベルの言語管理（国・政府、地域、教育、家庭など）から影響を受け、また他のレベルの言語管理に影響を与える。
7. 個人言語管理には国や地域、民族、世代、時代による差がある。

以上の7点が、個人言語管理について本論文で明らかになったことである。

図 - 1 言説生成の構造

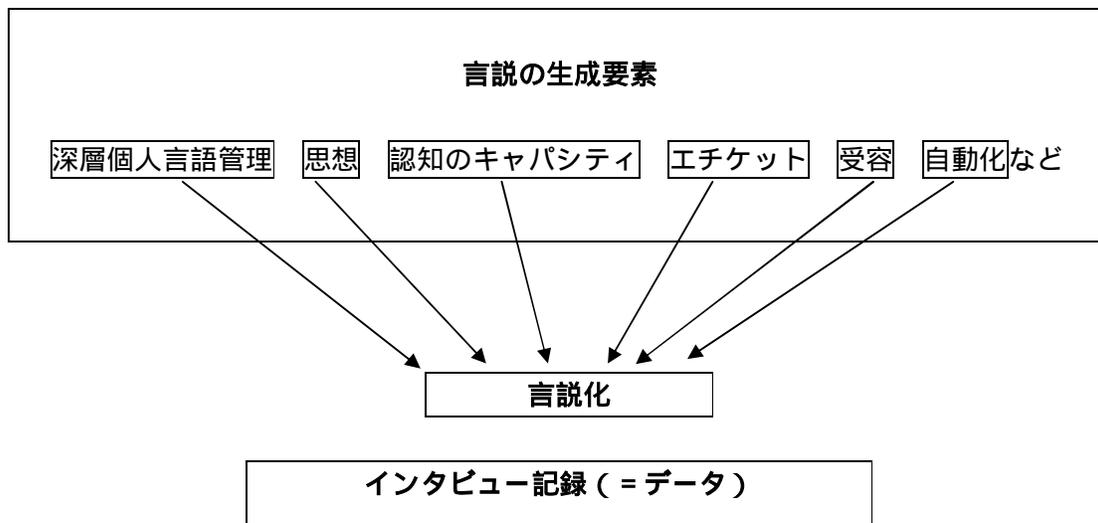


図 - 2 言説の生成要素から言説までの段階

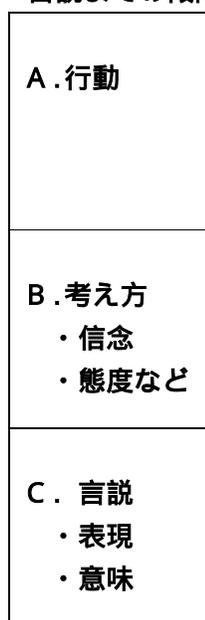


図 - 3 段階の組み合わせ

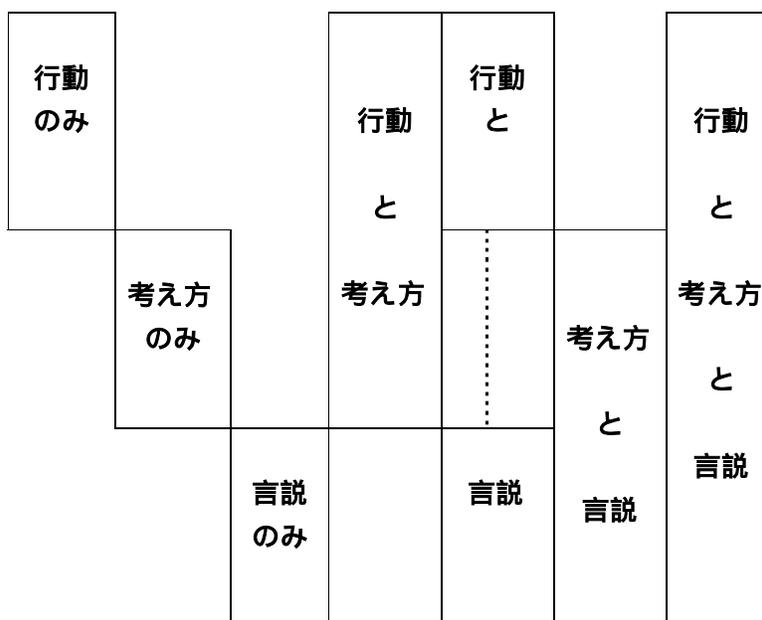
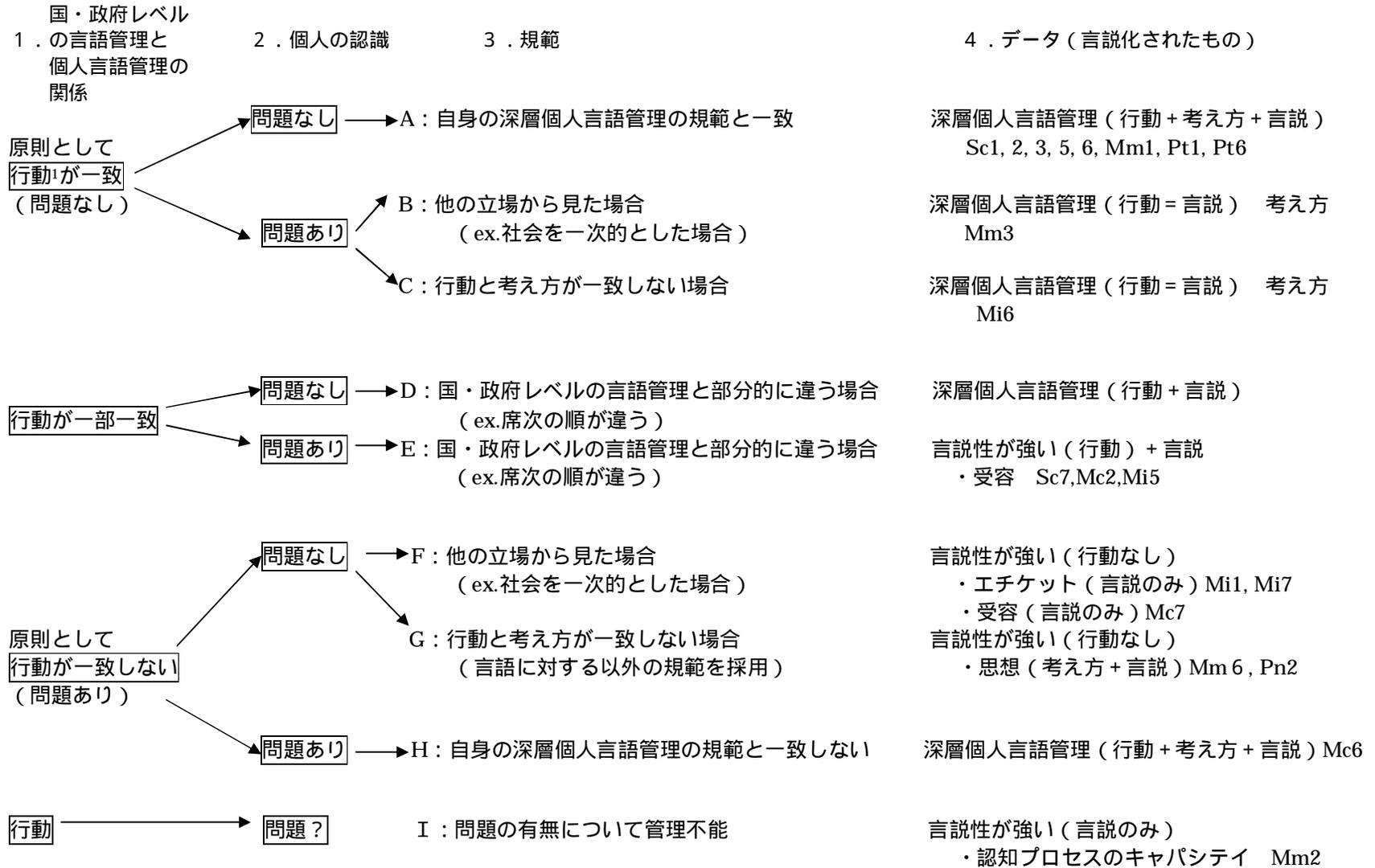


図 - 4 個人言語管理と国・政府レベルの言語管理との関係



¹ ここでの「行動」とは、調査対象者が述べている行動であり、実際の行動を示すものではない。

参考文献

- Afendras, E.A. and Kuo, E.C.Y. 1980. *Language and Society in Singapore*. Singapore University Press
- Asmah Haji Omar. 1979. *Language Planning for Unity and Efficiency*. University of Malaysia
- Asmah Haji Omar. 1982. *Language and Society in Malaysia*. Percetakan Dewan Bahasa dan Pustaka
- Asmah Haji Omar. 1987a. *Malay in its Sociocultural Context*. Ministry of Education
- Asmah Haji Omar (ed.). 1987b. *National Language and Communication in Multilingual Societies*. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pendidikan Malaysia
- Asmah Haji Omar. 1994. English in Malaysia: A Typology of Its Status and Roles. In Kandiah, T and Kwan-Terry J. (ed.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Times Academic Press. pp.242-260
- Asmah Haji Omar. 2000. Managing languages in conflict situation: A special reference to the implementation of the policy on Malay and English in Malaysia. In Jernudd, B.H.(ed.), *Journal of Asian Pacific Communication –Special Issue Language management and Language problems Part I*. John Benjamins Publishing Company. pp.239-254
- Baltazar, N.A. 1987. The communicative influence of mass media upon the National Language of the Philippines. In *National Language and Communication in Multilingual Societies*. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pendidikan Malaysia. pp.292-303
- Bautista, MA. Lourdes S. 1984. A survey of language use surveys in the Philippines, 1969-1984. In Andrew Gonzalez, FSC(ed.), *PANAGANI*. Linguistic Society of the Philippines. pp.94-105
- Beardsmore, Baetens H. 1998. Language Shift and Cultural Implications in Singapore. In Gopinathan, S., Pakir, A., Ho Wah Kam & Saravanan, V. (ed.), *Language, Society and Education in Singapore -Issues and Trends- Second Edition*. Times Academic Press. pp.85-98
- ベルトール (Bertaux). 2003 『ライフヒストリー - エスノ社会学的パースペクティブ - 』 小林多寿子訳 ミネルヴァ書房

- Cooper, Robert L. 1989. *Language planning and social change*. Cambridge University Press.
- 大学英語教育学会 (JACET) 関西支部第5次(1997-1999)研究プロジェクト「海外の外国語教育研究会」1999 『東アジアの外国語教育(資料)・日本の外国語教育診断』北斗プリント社
- Denzin, Norman K. 1989 *Interpretive Biography*. Newbury Park, London, New Delhi: Sage Publications
- de Souza, Dudley. 1980. The politics of language: Language planning in Singapore. In E.A.Afendras and E.C.Y.Kuo(eds.) *Language and society in Singapore*. Singapore University Press. pp.203-232
- 藤田剛正 1993 「第3章 シンガポール」『アセアン諸国の言語政策』アジア文化叢書7穂高書店 pp.95-136
- Goh, Edwin. 14. Oct. 1998a *Bilingualism in Singapore*. University of Tokyo. 講義資料
- Goh, Edwin. 16. Oct. 1998b *Language Planning in Singapore*. University of Tokyo. 講義資料
- Gonzalez, A.B. 1983. *Language and Nation*. Quezon City: Ateneo de Manila U.P.
- Gonzalez, Andrew FSC. 1984. Evaluating the Philippine bilingual education policy. In Andrew Gonzalez, FSC (ed.), *PANAGAN*. Linguistic Society of the Philippines. pp.46-65
- Gonzalez, Andrew FSC. 1994. English and Education in the Association of Southeast Asian Nations (ASEAN) Region: Past, Present and Future. In T. Kandiah and J. Kwan-Terry (ed.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Times Academic Press. pp.93-105
- Gopinathan, S. 1980. Language policy in Education: A Singapore perspective. In E.A.Afendras and E.C.Y.Kuo (ed.), *Language and society in Singapore*. Singapore University Press. pp.175-202
- Gopinathan, S., Pakir, A., Ho Wah Kam & Saravanan, V. (ed.). 1998. *Language, Society and Education in Singapore -Issues and Trends- Second Edition*. Times Academic Press.
- Gupta, A. Fraser. 1985. Language planning in the ASEAN countries. In Bradley, D. (ed.), *Pacific Linguistics 9*. Language Policy, Language Planning and Sociolinguistics in Southiest Asia. pp.1-14
- Gupta, A. Fraser. 1993. Spelling and Concord: the good, the bad and the indifferent. In *The English language in Singapore*. Singapore Association for Applied Linguistics. pp.47-58

- 萩原宣之 1987 「マレーシアの新経済政策と政治・経済変動」『国際政治』第 84 号
- アジアの民族と国家 - 日本国際政治学会編 pp.136-152
- 本名信行編著 1990 『アジアの英語』くろしお出版
- Hung, Tony, T.N. 2002. English as a Global Language and the Issue of International Intelligibility. In *Asian Englishes An international Journal of the Sociolinguistics of English in Asia/Pacific Vol.5, No.1*. ALC Press, Inc.. pp.4-17
- 石田由美子 2003 「ディスコースから見た政府の役割に対するシンガポール人の個人言語管理」宮崎里司/ヘレン・マリオット編 『接触場面と日本語教育』明治書院 pp.197-219
- (財)自治体国際化協会シンガポール事務所 2001 『マレーシアの教育』CLAIR Report No.217
- Kaplan, Robert B. and Baldauf, R.B. Jr.. 1997. *Language Planning From Practice to Theory*. Multilingual Matters Ltd.
- Karim, Nik Safiah. 1987. Bahasa Malaysia and the Language of Advertisement. In Asmah Haji Omar (ed.), *National Language and Communication in Multilingual Societies*. Ministry of Education. pp.315-325.
- 河原俊昭 2002 「第 3 章フィリピンの国語政策の歴史 - タガログ語からフィリピン語へ - 」河原俊昭編著 『世界の言語政策 多言語社会と日本』くろしお出版 pp.65-97
- Kuo, E.C.Y. 1980. The sociolinguistic situation in Singapore: Unity in diversity. In E.A.Afendras and E.C.Y.Kuo(ed.), *Language and society in Singapore*. Singapore University Press. pp.39-62
- Kuo, E.C.Y. 1984. Mass media and language planning: Singapore's Speak Mandarin Campaign. *Journal of Communication* 34.2. pp.24-35
- Kuo, E.C.Y. 1985a Language and identity: The case of Chinese in Singapore. In Tseng W. and D. Wu (ed.), *Chinese Culture and Mental Health*. New York: Academic Press. pp.181-192
- Kuo, E.C.Y. 1985b Language and social mobility in Singapore. In Wolfson, Nessa and Joan Manes (ed.), *Language of Inequality*. Berlin: Mouton. pp.337-354
- Kuo, E.C.Y. and Jernudd, B. H. 1994. Balancing macro-and micro- sociolinguistic perspectives in Language Management: The case of Singapore. In T. Kandiah and J. Kwan-Terry (ed.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Times Academic Press. pp.70-91
- Lam, A. Shun-Ling. 1994. Language Education in Hong Kong and Singapore: A

- Comparative Study of the Role of English. In T. Kandiah and J. Kwan-Terry (ed.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Times Academic Press. pp.182-196
- Llamzon, Teodoro A. 1969. *Standard Filipino English*. Manila: Ateneo University Press.
- Llamzon, Teodoro A. 1984. The status of English in Metro Manila today. In Gonzalez, FSC (ed.), *PANAGANI*. Linguistic Society of the Philippines. pp.106-121
- Llaneza, Imelda A. and Perez, Alejandrino Q. 1987. The National Language and the Mass Media in the Philippines. In Asmah Haji Omar (ed.), *National Language and Communication in Multilingual Societies*. Ministry of Education. pp.304-314
- May, Glenn Anthony. 1984. *Social Engineering in the Philippines*. Quezon City: New Day Publishers.
- 松永稔也 2003 「国家による言語政策と地方語の対応 - フィリピン、セブアノ語の事例より」『社会言語科学会第 12 回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.47-52
- 村岡英裕 2002 「質問調査：インタビューとアンケート」J.V.ネウストプニー・宮崎里司共著『言語研究の方法』くろしお出版 pp.125-142
- 中村良廣 1990 「第 5 章シンガポールの英語」本名信行編『アジアの英語』くろしお出版 pp.95-118
- Nekvapil, J. 2003. Language biographies and the analysis of language situations
千葉大学講演資料
- Neustupný, J.V. 1989. Language purism as a type of language correction. In B. H. Jernudd and M. J. Shapiro (ed.), *The politics of language purism* Berlin and New York, Mouton de Gruyter. pp.211-223
- ネウストプニー、J.V. 1995「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部日本語学部講座 pp.67 - 82
- ネウストプニー、J.V. 1997「言語管理とコミュニティ言語の諸問題」古川ちかし訳『多言語・多文化コミュニティのための言語管理 - 差異を生きる個人とコミュニティ - 』国立国語研究所 pp.21-37
- Neustupný, J.V., 1998 “Teaching Communication or Teaching Interaction?” 『異文化コミュニケーション研究』第 10 号(1997)抜刷 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 pp.1-13
- ネウストプニー、J.V. 1999「第 1 章 言語学習と学習ストラテジー」『日本語教育と日本語学習 - 学習ストラテジー論にむけて - 』くろしお出版 pp.3-21
- ネウストプニー、J.V. 2003 (未発表) ハイムズ式モデル表 (1 枚)

- 野村亨 1990 「マレーシアの教育と英語」本名信行編著『アジアの英語』くろしお出版 pp.119-156
- 大上正直 1997 「フィリピンの言語政策」小野沢純編著『ASEAN の言語と文化』高文堂出版社 pp.47-72
- 太田勇 1995 「シンガポールの言語環境 - 華人社会からの考察 - 」『世界の言語問題 1』国立国語研究所 pp.29-49
- 太田勇 1997 「第4章 シンガポールの言語と文化」小野沢純編著『ASEAN の言語と文化』高文堂出版社 pp.109-139
- 岡部達味 1984 「シンガポールの二種言語政策」土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』国際関係論のフロンティア 3)東京大学出版会 pp.187-212
- 小野原伸善 1998 『フィリピンの言語政策と英語』窓映社
- 小野沢純 1997 「マレーシアの言語と文化」小野沢純編著『ASEAN の言語と文化』高文堂出版社 pp.167-195
- Pakir, A. 1994. Education and invisible language planning: The case of English in Singapore. In T. Kandiah and J. Kwan-Terry (ed.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Times Academic Press. pp.158-181
- Pascasio, Emy M. 1984. Philippine bilingualism and code-switching. In Andrew Gonzalez, FSC (ed.), *PANAGANI*. Linguistic Society of the Philippines. pp.122-134
- Pattanayak, D.P. 1984. Language policies in multilingual states. In Andrew Gonzalez, FSC (ed.), *PANAGANI*. Linguistic Society of the Philippines. pp.75-84
- Perez, A.Q. 1987. Vocabulary development of Pilipino. In *National Language and Communication in Multilingual Societies*. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pendidikan Malaysia. pp.329-344
- Platt, J. 1985. Bilingual policies in a multilingual society: Reflections of the Singapore Mandarin Campaign in the English language press. In Bradley, D. (ed.), *Papers in South-East Asian Linguistics 9. Language Policy, Language Planning and Sociolinguistics in Southeast Asia*. pp.15-30
- Prabhu N.S. 1993. *Descriptive and prescriptive approaches to the norms of the English in Singapore*. In *The English language in Singapore*. Singapore Association for Applied Linguistics. pp.1-5
- Santiago, A.O. 1987. Suggested procedure in the elaboration of the lexicon of the National Language in a Multilingual society: Philippine setting. In *National Language and Communication in Multilingual Societies*.

- Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pendidikan Malaysia
pp.345-354
- 芝田征二 1990 「フィリピンの英語」本名信行編『アジアの英語』くろしお出版
pp.157-192
- 渋谷勝己 1992 「第9章 言語政策」『社会言語学』おうふう pp.159-183
- 白石隆 1987 「上からの国家建設 - タイ、インドネシア、フィリピン」『国際政治』
第84号「アジアの民族と国家」日本国際政治学会編 pp.27-43
- Sibayan, Bonifacio P. 1994. The Role and Status of English vis-à-vis Filipino and
Other Languages in the Philippines. In Kandiah, T and Kwan-Terry J.
(ed.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*.
Times Academic Press. pp.218-241
- 杉本均 1997 「マレー半島における民族教育政策」小林哲也・江淵一公編『多文化
教育の比較研究』第3版(財)九州大学出版会 pp.259-286
- 杉村美紀 2000 『マレーシアの教育政策とマイノリティ - 国民統合の中の華人学校』
東京大学出版会
- Tan, J., Gopinathan S., Ho, Wah Kam (ed.) 1997. *Education in Singapore*. Simon
& Schuster (Asia) Pte Ltd.
- Tay, W.J.M. 1984. *Trends in Language, Literacy and Education in Singapore*.
Census Monograph No.2. Singapore: Department of Statistics.
- Tay, W.J.M. 1994. Language as a mirror of modernization: The case of English
and Chinese in Singapore. In T. Kandiah and J. Kwan-Terry (ed.),
English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution.
Times Academic Press. pp.139-157
- Woods, Devon. 1996. *Teacher cognition in language teaching -Beliefs,
decision-making and classroom practice*. Cambridge University Press.

参考資料

- URL: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html>
- URL: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>
- URL: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/data.html>
- URL: <http://www.gov.ph/aboutphil/general.asp>
- URL: <http://www.mandarin.org.sg>
- The Straits Times: Jul. 27, 1999 "Please speak English",
- The Straits Times: Aug. 2, 1999 "The trouble with Singlish"

The Straits Times: Aug. 28, 1999 "Say hi to the cosmo-lander",
The Straits Times: Sep. 3, 1999 "No one owes Singapore a language"
The Straits Times: Apr. 27, 2000 "PCK set to show off his English",
The Straits Times: Apr. 30, 2000 "Buck up, poor English reflects badly on us"
The Straits Times: May.17, 2000 "PCK still as funny as ever"
「比を世界のコールセンターに」(マニラ新聞 2004.5.3)
「入学試験の結果発表」(マニラ新聞 2004.6.5)
「英語中心に戻したい」(マニラ新聞 2004.6.15)